

新 刊 紹 介

1. 墨書土器と文字瓦

——出土文字史料の研究——

吉村武彦・加藤友康・川尻秋生・中村友一編

2. 近世海産物の生産と流通

——北方世界からのコンブ・俵物貿易——

菅原慶郎著

3. 中央アジア牧畜社会

——人・動物・交錯・移動——

今村薫編

新
刊
紹
介

吉村武彦・加藤友康・川尻秋生・中村友一
編

「墨書土器と文字瓦」

——出土文字史料の研究——

八木書店 二〇一三・一刊

B5 三九二頁 八〇〇〇円

本書は明治大学日本古代学研究所（以下、明大古代研）が二十年以上かけて推進してきた、墨書土器を初めとする出土文字史料のデータベース構築及び研究の集大成である。幅広い視点から計三十本の論考が収録され、墨書土器研究の概要から最前線までを知ることのできる一書となっている。以下、簡単ではあるが本書の内容を紹介する。なお、紙幅の都合により各論考のタイトルは割愛することをご了承いただきたい。

第一部は墨書土器・文字瓦研究の概論である。吉村武彦が出土文字史料の歴史を概観し、三上喜孝と加藤友康が墨書土器の特徴と機能を明らかにする。文字瓦については中村友一が研究の概要をまとめる。また、矢越葉子により明大古代研「全国墨書土器・刻書土器、文字瓦横断検索データベース」

ス」について、その概要や利用方法が紹介される。

第二部では「場」に焦点を当てる。日本国内では、市大樹が宮都、柴田博子が地方官衙、川尻秋生が寺院、栗田則久が集落出土の墨書土器について論じ、遺跡の性格によって墨書土器の傾向が異なることが浮き彫りにされる。さらに、研究の視野は東アジアを中心とする漢字文化圏にまで拡がる。韓国は金在弘が墨書土器、李炳鎬が文字瓦について三国（統一新羅間の展開を追い、石黒ひさ子が中国の墨書陶器・陶磁器について概観し、ファム・レ・フィがベトナムにおける出土文字研究の新視点を提示する。第三部はより多角的な視点から検討が加えられる。鈴木景二が和歌等の仮名書きを、荒木志伸が一、二文字の墨書について論じる。また、山路直充が人面墨書土器祭祀を検討し、渡辺一は文字瓦の印の元字に着目する。荒井秀規は木簡・墨書土器の関連性や両者の役割を考察し、犬飼隆は日本語学研究における墨書土器・文字瓦の有用性を指摘する。さらに、高島英之が刻書紡輪（紡錘車）研究の現状を示す。

第四部では、国の施設(吉野武、新名強、酒井芳司)、地方官衙や在地有力者の集落(鈴木敏則、木原高弘)、神祇関連(平石充)、寺院(松尾史子)、荘園(出越茂和)と、性格の異なる遺跡を取り上げ、遺跡ごとに墨書土器の特徴が示される。最後に附論として、高島と大川原竜一が、墨書土器を構成する土器と墨について解説する。

本書を読んで感じるのは、墨書土器を史料として扱う難しさと面白さである。本書の各論考の多様性は、とりもなおさず墨書土器等の出土文字史料の多様性を意味する。また本書は、墨書された文字と遺跡の性格が必ずしも直接的に結びつかないことや、墨書土器の虚構性を指摘し、文字だけでなく、遺構の性格や周辺環境、記載位置、出土状況など様々な要素を併せた、複合的・巨視的な視点から墨書の意図を検討する必要性を訴える。その一方で、墨書の意図を明らかにすることで、当時の人々の生活・行為をよりリアルに描き出せることも本書は示す。

近年墨書土器研究は下火になっていると、その声が数名の論者から上げられていたが、

本書と明大古代研データベースが研究の活性化に寄与することが大いに期待される。

(編 佳子)

菅原慶郎著

『近世海産物の生産と流通』

—— 北方世界からのコンブ・俵物貿易 ——

吉川弘文館 二〇二二・一二刊
A5 二二二頁 八〇〇〇円

本書は幕府直轄地長崎で行われる中国人との貿易で、輸出商品となる北方世界(松前・蝦夷地、南部・津軽藩領域)の産物、特にコンブの商品的位置づけについて、一八世紀後半を対象に分析することを目的としている。本書は序章、第一部(三章立て)、第二部(三章立て)、第三部(三章立て)で構成されている。続いて各章の概略について紹介したい。

序章では、「俵物」「諸色」に関する総合的な流通システムを分析する上で、これらの最大の生産地であった北方世界を検討対

象とする重要性を指摘している。

第一部では、本書で特に注目する北方世界で産されたコンブの流通システムについて検討を行っている。第一章では、松前・「蝦夷地」で生産される輸出コンブの集荷・出荷過程に関して検討を加え、コンブの商品としての特質を明らかにしている。第二章では、一八世紀後半以降にコンブの一大生産地となった「東蝦夷地トカチ場所」を考察対象として、コンブの生産構造の解明に取り組み、「トカチ昆布」の商品的位置づけを考察している。第三章では検討対象として看過される傾向にあった本州産のコンブのうち、南部藩領で生産される長崎向けコンブの流通システムについて検討を行い、南部昆布の長崎貿易に占める歴史的意義を示している。

第二部では、松前・「蝦夷地」を主な分析対象としてナマコ・アワビの流通システムを究明している。また、それらの長崎貿易向けに限定されない商品的な特質に関して分析を行っている。第一章では、松前・「蝦夷地」で生産される輸出商品としての俵物の集荷過程について検討を行い、各論

出商品の特質に注目している。第二章・第三章では従来の俵物研究が松前・「蝦夷地」全体を対象に語られてきたらしいを踏まえ、場所請負人経営下の場所ごとにおけるナマコ・アワビの生産過程や商品の特質を明らかにしている。具体的には、第二章では近江商人・住吉屋西川家により経営された「西蝦夷地タカシマ・オシヨロ場所」を、第三章では出羽出身の竹屋林家により経営された「西蝦夷地上・下ヨイチ場所」を対象地として設定し、それぞれの場所での商品生産の特質を論じている。

第三部では、ラッコの毛皮を含めた輸出品品の流通システムについて、長崎向けに留まらない商品を解明している。第一章では、松前・「蝦夷地」におけるラッコの毛皮の集荷方法に関して検討を行い、俵物やコンブといった他の輸出品とは異なる集荷システムが構築されていたことを指摘している。第二章では、これまでの総括という位置づけで、北方世界における俵物とコンブの商品的特質について再度検討を行い、各商品に応じた流通システムが構築されていたことを明らかにしている。終章では、

各章での要点をまとめつつ、俵物研究における輸出品としてのコンブの位置づけについて論じている。

本書での指摘にあるように、北方世界で産されるコンブの重要性は、輸出品の流通過程に関する従来の研究においても言及されてはいたものの、その流通システムをクリアにする研究はなされてこなかった。こうした動向を踏まえて、本書は輸出品として重要度の高いコンブの商品的特質を明らかにし、近世流通史におけるコンブの位置付けを図っている。さらにそれに留まらず他の諸俵物とも比較を行っている。そのような意味で重要かつ重要性の高い著作であると言える。(竹澤 翔)

今村薫編

『中央アジア牧畜社会』

——人・動物・交錯・移動——

京都大学学術出版会 二〇二二・三刊
A5 二六二頁 三六〇〇円

本書は、中央アジアにおける人間と家畜

化された動物との関係について、歴史生態学の立場から考察する論文集である。自然環境と連動する家畜、人間社会の相互作用を「歴史生態」と定義し、その実態を人類学や遺伝学、社会学の分析手法で解明することを目指す。中央アジアといえど考察の地理的範囲は広く、東のモンゴル高原や西のイラン高原も含む。所収論考の多くがラクタを扱っている点は特徴的で、読者は家畜化の開始から現代に至る時間軸の中で、ラクタとの関係に限って読み進めることも可能である。

本書は序と概説のほか、三部構成の八本の論考からなる。第一部では、人間と動物の関わりが歴史的に俯瞰される。第一章「天山山脈の最初の牧畜民」(久米正吾・新井才二)は、中央アジアで初期の牧畜民や農民を考古学的に調べることの重要性を強調し、近年の議論の動向や著者らによる発掘調査の成果を踏まえた「最初の牧畜民」の由来、生業の在り様について遺伝学的に考察する。オレンブルグを例に、十八、十九世紀の中央アジアとロシアの交易を論じた第二章「ラクタと都市が支えた草原の移

動」(塩谷哲史)では、ロシアのヒヴァ遠征にも触れながら、有用な輸送手段として用いられたラクダの姿が描写される。第三章「カザフスタンにおける家畜ラクダ二種とそれらのハイブリッド作出」(今村薫)は、同地でヒトコブとフタコブの二種のラクダが混在している現状を明らかにし、その経緯とそれらの交雑種が作り出されてきた歴史的背景を考察する。第四章「中国人民公社期におけるラクダ飼養」(児玉香菜子)では、内モンゴル自治区エゼネー旗でのラクダの頭数増加の背景に、政府の強力な増産政策や、数の増加を喜ばしいと考える牧民の価値観とそれを可能にする技術があったことが示される。

牧畜の技術的側面を取り上げる第二部では、第五章「ラクダの去勢」(ソロンガ)が、

内モンゴルのフタコブラクダを事例に、牧畜民にとって去勢ラクダが有する多様な可能性について論じ、第六章「山地環境下における牧畜と季節移動」(廣田千恵子)では、アルタイ山脈山にてカザフ牧畜民が行う季節移動を焦点に、その仕組みと特徴が詳述される。

第三部は、現在の環境問題と牧畜の関係を主題とする。第七章「アラル海災害からの「復興」における牧畜の役割」(地田徹朗)は、丹念なフィールドワークと文献調査をもとに、世界的に知られる環境破壊であるアラル海災害からの復興の中で、ラクダ飼養を中心とする牧畜が漁に代わり住民の生活手段となったことを指摘し、同地域での牧畜の今後についても展望する。第八章「乾燥・半乾燥地における人と家畜」

(星野弘方)は、カザフ・ドライステップにおける雨量に合わせたラクダ飼養やモンゴル高原北部で見られる遊牧システムが、放牧時の最適な草地利用に寄与したことを明らかにする。

本書の問題意識は、中央アジアは単なる交易の通過地点ではなく、古代から現代まで地域独自の人間活動が生起してきた場所である、という認識から出発している。時間軸を家畜化の端緒まで遡ることで、シルクロードとともに想起されがちな世界を広く人類揺籃の場として描き出した点は、本書の大きな功績であろう。ラクダに注力しすぎる向きはあるが、人類史的な視野を持つ本書は、人間と動物との交流や人類の生業に関心のある研究者にとって必読の書と言える。(大野和馬)